

SHINCUB91

(株)辰 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS渋谷ビル5F tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450 URL:http://www.esna.co.jp



SOI HOUSE 撮影：アック東京

今月のトーク/monthly talk

渚

SOI HOUSE の施主家族であり、設計者である遠藤治郎氏は、建築家であり、舞台美術家でもあり、音楽映像監督、照明家、写真家など、領域を固定しないアーティストです。大学卒業後、同窓であった大堀伸氏と鄭秀和氏の3人で建築設計事務所「インテンションナリーズ」を設立。3年限定で仕事をした後、1998年「ゲストハウス」を遠藤幹子氏と設立。ラフォーレ原宿、パルコなどのインテリアやディスプレイの設計・施工の元請を数多く行ない、同年オランダへ移住。その後2002年単身スリランカへ。国立モラトワ大学の研究室で講師、名誉助手を務め、同年末にタイへ移住。バンコクでコンサート舞台の照明設計を始め、翌年から日タイ交流文化事業「Soi-music」の主催等、活躍の幅を広げられました。「Soi」とはタイ語で路地のこと。大通りからちょっと入った「路地」で活動するタイのミュージシャンやアーティストのポップカルチャーを世界に紹介し、新しいアジアの文化交流の場を造ってゆく試みだそうです。2005年の横浜トリエンナーレでも「Soi-Project」として音楽だけでなくアーティストたちとのコラボレーションで成果を挙げ、遠藤さんは中心的な役割を果たしました。

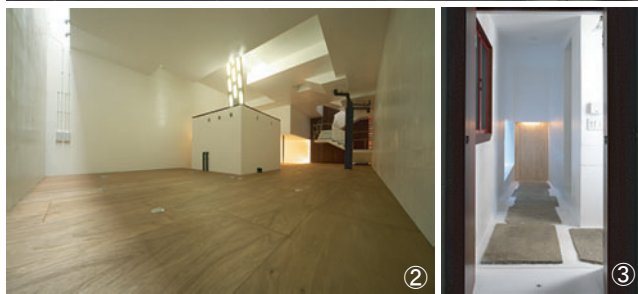
バンコクと日本の両方を活動の拠点にする遠藤さんに、スリランカ、そしてタイとの関わりを聞いてみました。「スリランカを訪れたのは、ジェフリー・パワの建築に興味を持ったから。パワは38歳になってから建築家としてデビューしたのですが、彼の作る建築は、伝統、コロニアル、モダンといったものが自由に混じり合っています。また敷地の原状を生かすという特色があります。ホテルのロビーの床に岩がごろごろとむき出しになっていたり、海と

一体化して見えるプールだったり…。今流行のトロピカルアジアのリゾート建築の原型ですね。その美しく贅沢な空間に、リゾートホテルで有名なアマングループの会長が触発され、癒しの空間が各地に広がっていききました。」

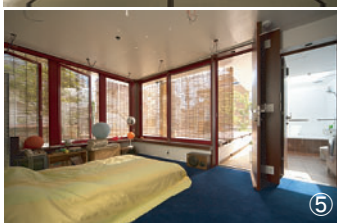
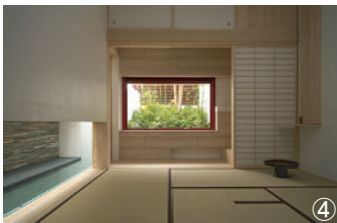
「タイに惹かれるようになったのは、オランダで知り合ったタイ人の影響が大きいです。タイと日本には、アジアのほかの国に比べて共通する条件が多いでしょう。植民地になったことがないとか、王国であるとか。それからタイの留学生やアーティストのほとんどが英語を話せるのだけど、ネイティブと違ってこちらが会話にすっと入っていきける気安さがあります。英語が公用語の一つであるスリランカとは、そのあたりがちよっと違う。またタイには3つのSがあるといわれています。スイイ=きれい、サヌック=楽しい、サバイ=気持ちいい、この3つが大事。間違っていることがだめという価値観がありません。国際空港の建設なんか、何度延期になったことか。でも世界のいろいろな場所を訪れて、僕もやはりデザインが100%完璧な場所にはあまり魅力を感じなかったですね。いかに問題がないか、ということより変化し続けることが許されている空間がしっくりくる。バンコクはそういう余裕がある場所なんですよ」

遠藤さんは『渚』という言葉で、変化しつづける空間、あるいは変化を許容する空間、雑多なものの混在がバランスよく調和した空間を建築的にとらえています。気体、固体、液体が交錯し、それも常に一定ではなく、幅を持ち、先がわからない空間。閉じているのか、開いているのか、デッドエンドを作らず、また違うところにつながる可能性を秘めた予測できない空間を求めて、その仕事ぶりも多方面に広がっていきます。

SOI HOUSE



①屋全景。部屋は全部で4つ、全室に玄関。1階は茶室とダイニングキッチン(居間兼 SOHO)のみ。後者は茶室への亭主口があり、水屋としても利用。接道するL字の黒い部分は換気と電気引き込みとゴミ置き場②地上2階の形がそのまま現れた天井の地下室。中央に屋根付きのトイレ③茶室へのアプローチ。道路から続く石は、敷地にあったものを再利用④茶室。左の床の間は、幅2間半、高さ半間のパノラマ型で、地下の天窗を兼ねたガラスの廊下の奥に色とりどりのタイの石を積み上げた壁面が美しい⑤2階寝室。正面がデッキとアプローチ。外からもアクセスできる浴室は全面トップライト。



撮影：アック東京

異種の要素が交じり合う、足し算の住宅

4年ほど前に同じ町内で等価交換し引っ越したこの敷地にはバラックがあった。今の基準法下では絶対に通らない古い木造平屋、が、それはとても魅力的な小さな家であった。それ故、新築でこれより素敵な建物が造れるのか？これが当初最も悩んだことである。建物は本来1回でできたものには限界があり、それよりも敬愛するスリランカの建築家ジェフリー・パワの作品に見られるように時間に乗せて作っていった方が決定要因にリアリティがあると僕は考えている。例えばパワの自邸の5期の工事は10年間におよんでいる。敷地に残っていた長屋と樹木を「苗床」とし、切妻にフラットルーフを付け足し、私道は内部空間に、新築と「減築」、リージョンとミッドセンチュリー、計画と成り行きといった複数の要素がバランス良く入り混じっているすばらしい建築である。

SOI HOUSEの工事も決定が遅かったり、変更が多かったり、工事中にはご迷惑をおかけしたと思うが、ある意味自分のそういうこだわりがあった。日本の多くの建築が求められる、段取りよく手戻りがない施工は、手間も押さえ安く仕上がるが、できたものはきれい過ぎ老けるのも早い。SOI HOUSEはまず木を中心に植える事から考えた。最初のプランでは、神宮前に木しかない空き地を作ろうという野望があったが、さすがに何も建てないわけにはいかず最低限度のものを上に作ることにした。それでも建物は木より高くならないようにし、許容容積の半分は将来増築用に残し、対照的に大きな地下室を作った。もともと敷地にあった柿の木は地下室の工事のために残すことを断念したが、内部空間が減っても、木はあくまでも地面とつながっているようにした。成長していく木が建物より主になってゆくことで、家の形が隠れてわからなくなるくらいがいい。

竣工感や、明快さ、そして建築的一貫性もここではあまり求めていない。いかに様々な空間、材料、色といったものの多様な質を引き算的でなく足し算的に紡ぐ事を、成り行きに身を任せながら造り出そうとした。そして、今もこの建物は「建築中」なのである。それは違う要素が入り混じり、甘くて、すっぱくて、辛いけれども成立している「タイ料理」のようなものだとすれば意外とわかりやすいかもしれない。タイ料理は作ったらもう触るな、という料理ではない。砂糖、酢、唐辛子、ナンプラーという4種類の調味料がテーブルに常備してあり、酸っぱすぎたら砂糖、甘すぎたらナンプラーを、という足し算の料理である。そしてそれは、自分が長い間テーマとしている『渚』すなわち、「異種のものごとがぶつかり合う地点こそ不安定で美しい」というデザインの一番上で考えていることにつながっていくのである。

(遠藤治郎氏談)

所在地：渋谷区
用途：住宅
構造：RC造 一部鉄骨造
規模：地上2階、地下1階
設計：New-guesthouse + Gaino structural DeSIGN office
基本竣工：2007年8月
竣工：将来解体時

bow cafe 店舗内装工事



①全景。内部とは大きな2枚扉で仕切ることができる②バーカウンター。奥の厨房との壁には無双格子が設けられ、光と視線の調節を兼ねている③店内からデッキスペースを臨む。前面道路の向こう側がお台場海浜公園④レストランスペース。タイの什器がしっかりと納まっている

人とのつながりを大切に癒しのアジアン・カフェ

お台場海浜公園を眼前に臨むマンション郡の一角に新しくオープンした店舗の内装工事である。名前が示すとおり、愛犬連れの住民にも開かれた憩いのスペースである。

室内はタイの家具に造詣の深いオーナーの趣向を生かした、アジアンテイストの内装になっている。通りに面したオープンデッキには緑を存分に配置し、アーチになった2枚扉の内側のレストラスペースは天井を高くとり、木の床やルーバーなど自然素材を生かした空間とした。奥のバーは、オーナーがお客さんとして足しげく通い愛した、以前この場所にあった店のカウンターを移設再利用した。

車椅子の人やお年寄りにも配慮して、店内はすべてバリアフリーとなっており、特に洗面所はゆとりを持たせ、トイレには手すりやアームレストも設置している。店長やスタッフが、自ら壁の塗装も行なうなど気心の知れた仲間で作上げたこだわりの店である。

8月にお引渡しを終え、オーナーがタイで買い付けた家具が9月半ばに到着してからの撮影であったが、道行く近隣住民の方が次々と声をかけてくる。すでにお客様の心を捉えているようだ。

(細江英俊氏談)

所在地：港区台場
用途：店舗
設計：細江英俊建築設計事務所
お引渡し：2007年8月



撮影：アック東京

先月号ご登場いただいた高木栄一さんからのご紹介は、(株)マシン・エイジの須田哲正氏です。高木さんとは「エイチャン」「テッチャン」と呼び合う仲。日本でミッドセンチュリーブーム（1950～70年代に世界的に流行したデザイン様式で、機能性を備えた有機的なデザインが特徴）を巻き起こし、目黒通りは須田さんのお店ができてから、家具店が次々と出店、いまや地域活性化の目玉として行政も注目しています。

Tetsumasa Suda

—高木さんとの出会いはいつ頃ですか？

須田：8、9年前でしょうか。当時、僕はミッド・センチュリー モダンの家具の店を開き、その家具を入れるにふさわしい「ケーススタディハウス」を建てたいという夢が膨らんで、建築業界へのコネクションを求めています。店のお客さんを通じて、デザイナーズマンションで有名な高木さんにぜひ会いたいとラブコールを送っていたのです。

—ミッド・センチュリーの家具を扱うようになったきっかけは？

須田：最初はアール・デコの家具だったんです。大学卒業後、半導体試験装置会社にシステムエンジニアとして入社し、その後シリコンバレーに駐在したのですが、その時のアメリカ人の上司がアール・デコの家具を好きで、彼の家で上質の骨董家具がごく普通の家具のように使われているのを見てびっくりしました。とても心地よくてね。もともとデザイン、ファッションに興味があり、また以前から自分でビジネスを立ち上げようという夢もありました。「これだ」と決めてから事業計画など1年間の準備期間を経て帰国、会社を設立しました。

—最初にシステムエンジニアでいらしたのに、ちょっと意外ですね。

須田：高校時代の「夢」はパイロットでした。ところが視力が弱くなり、その夢がかなえられなくなって、大学には入ったけれど、もんもんとした日々を過ごしていました。それで飛行機の近くで仕事ができればと、整備士の学校を受けて合格。故郷の名古屋に帰り、なじみの店のオーナーに「今度大学をやめて、整備士になるんだ」と報告に行ったところ、「お前の夢は整備士になりたかったわけではないだろう。将来、人に説明するときにパイロットになりたかったんだけど、という前置きが必ず付く。それでいいのか」と言われ、気が付いたんです。パイロットになりたかったのは、高収入で、いろんな国に行けて、その国の文化や人々の暮らしに触れることができるからだ、と。「それなら、飛行機をチャーターできるくらいの実業家になればいいじゃないか。お前は夢の立て方がまちがっている」と彼は論してくれました。大学に戻って勉強して、当時伸びていたハイテク関連の会社に入りました。まずは世間で仕事の経験を積み、起業の機会を探すことにしました。

91年の3月末に会社を設立、6月にアンティーク中心の家具店「アール・デコモダン」を目黒鷹番にオープン。94年、欧米でブームとなっているミッド・

センチュリー家具を扱う「ミッド・センチュリー モダン」を青山に出店。95年、ミッド・センチュリー家具のレプリカを中心に製造販売しているロサンゼルス社のMODERNICA社の日本支社「モダニカ」を目黒通りにオープン。その後も全国各地に店舗を出店する。

—ミッドセンチュリーブームの仕掛け人と言われていますが？

須田：ただ骨董品のレプリカを売ろうというだけではなく、その魅力が大勢の人に伝えたいという思いがあったから共感を得たと思います。またインテリア雑誌「エル・デコ」で特集を組んでくれたことが大きかったですね。エル・ジャポンに店舗記事の掲載のお願いに伺ったら、後の「エル・デコ」の編集長がちょうどいらっしやって、「今度新しいインテリア雑誌を創刊するから、新しい企画をいっしょにやろう」と提案してくれた。目黒通りが、今のようにおしゃれな家具通りとして認知されるきっかけ作りをしてもらえました。

僕は、今年で47歳ですが、現在東京広尾ロータリークラブに属し、商工会議所や目黒区の観光街づくりなどのお手伝いをする機会も増えてきました。日本各地で地域活性化が言われていますが、目黒区長は自由が丘、中目黒、そして目黒通りの知名度に期待しています。最近では韓国人の観光客が目立つようになってきました。店をたずねてきてくれた韓国人のカップルによると、韓国のメジャー雑誌では目黒通りの特集が組まれており、おしゃれマップまであるらしいんですよ。クリエーター、アーティストなど流行に敏感な旅行者がたくさん来ています。

僕自身にとっては今、タイが一番魅力的です。感性が日本人と相性がいい。半年前バンコクの家具フェアで見かけたファニチャーショップが実に僕好みで、店長ともすっかり話し込んでしまったのですが、そのデザイナー兼オーナーが建築家 Duangrit Bunnag（デュアングリット・ブナグ）だったのです。実は商務省のスピーチを行うくらいタイでは有名な建築家です。ぜひいっしょに仕事をしましょうという話になりました。日本とタイはアジアの国々の中でも共通項が多く、感性が細やかなタイ人と日本人はものづくりを一緒にできると確信しています。コストが安いことも、工場を現地に作ったり逆にマーケットにすることもできる。ソウルも魅力的ですがバンコクも魅力的。実は明日からまたバンコクへ行きます。来年あたり何か新しいことを始められそうな予感がしています。

—本日はどうもありがとうございました。

「バンコクは魅力的ですよ。日本人とタイ人とは感性が似通っていると感じますね」

須田哲正

1960年 愛知県生まれ。武蔵工業大学経営工学科卒業。
83年半導体試験装置メーカーにシステムエンジニアとして入社。その後米国現地法人に赴任。91年帰国。(株)マシン・エイジ設立とともに「アール・デコモダン」を目黒通りに開店。その後、各地に店舗を展開。2007年、新丸の内ビルに「ケーススタディショップ」をオープン。
<http://www.casestudy.co.jp>

新丸の内ビルにオープンした「ケーススタディショップ」にて。
須田さんにご紹介いただいた次回のお客様は ㈱S・Pプロジェクトの井上頌夫さんです。
お楽しみに。



メンテ魂

その後、
お住まいはいかがですか

第1回 OMNI QUARTER

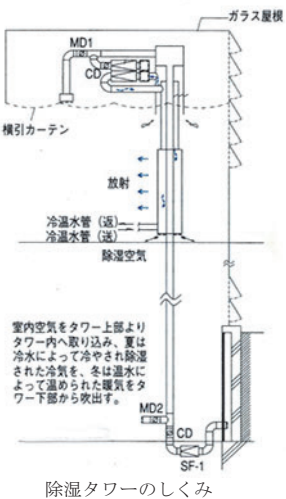
所在地：港区北青山
用途：住宅+ギャラリー+店舗
構造・規模：RC造、一部鉄骨造
地下1階、地上4階
竣工：2000年1月
設計：北山恒
／architecture WORKSHOP
設計協力：ネオタイド建築計画
構造設計：構造計画プラスワン
設備設計：郷設計研究所
照明設計協力：LPA
施工：辰+ユニホー



今月から新企画「メンテ魂～その後お住まいはいかがですか」をスタートします。この10月1日で弊社も設立8周年となりました。施工させていただいたいくつかの建物をたずね、これまでのメンテナンス状況を現場担当者に確認しながら、お客様に現在の様子を伺います。建物は1度建てたら終わりではありません。不具合を修正したり、お住まいになっていく中で改善点が出てきたり、施工者は建て主の方と長いお付き合いをしていくことになります。そんな様子を少しでもお伝えしていくことができれば、と思います。

2000年1月、裏青山に竣工した「OMNI QUARTER」は建築プロデューサー H 氏の自邸と店舗の複合ビルです。地下1階がギャラリーとアトリエ、地上1,2階がデザイナーのブティック、3階が家族の個室で、最上階の4階はパーティールームにもなる広いリビングダイニングです。建物の特長は、ほとんど温室のようなサッシとガラスの壁面と、巨大な吹き抜けの階段室であるバッファゾーンでしょう。この空間はダブルスキンの環境調整装置と位置づけられています。地下から4階まで貫く「除湿タワーシステム」や「熱回収エアサイクルダクトシステム」などいくつか領域空調システムを導入しています。施工担当の宮島課長と奥様を尋ねました。

宮島：竣工当初から、雨漏りがいろいろところで生じて対応に追われました。サッシの収まりの問題や別の理由もあったりして、雨漏りの原因箇所はなかなかすぐにはわからず、ご迷惑をおかけしました。加えて、そろそろ建物全体のシール（シーリング材＝サッシの目地回り、接合部の充填材）の交換時期に入ってきたこともあり、見積をお持ちしています。建物が大きいのでかなりの金額になってしまいます。



H 様：大事な本が水びたしになったこともありました。シールの工事もどンドンやっていたらこうかと思っています。でも私は、この建物には基本的にはとても満足しています。特に建築面積に入らない、この階段スペースの開放感がとても気に入っています。明るいし、春、秋、冬の3シーズンは快適。全部透かし状態の建物だから、3月になったら暖房は要りません。T シャツ一枚の暖かさ。ただホコリはすべて下に落ちていくもの、ということを実感しますね。掃除ができないところもあるし広いから大変です。一やはり、夏場の日差しは相当影響が大きいのでしょうか。横引きカーテンでは追いつかないのでしょうか。

H 様：そうですね。特にここ2、3年は38度とか39度とか、昔じゃ考えられない暑さでしょう。北山先生も想定外の気温だとおっしゃっていました。そこのブーゲンビリアもすごく茂っちゃって、年々葉の落ちる期間が短くなっています。2年前4階に2機エアコンを入れました。それで暑さはだいぶ解消されましたね。

個室はPS（輻射冷暖房機器）を入れたので快適です。暑くて眠れない夜、というのはありません。友人にもすすめています。

—この除湿タワーはいかがですか。

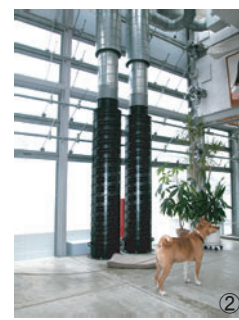
宮島：騒音の問題があって、1度調節しましたね。それから外枠を可動式にしてメンテナンスしやすいようにしました。除湿機能に問題はないです。

H 様：涼しいので、うちの犬はずっとこの傍から離れないでくつろいでいますよ（笑）

—そういえば奥様は、アトリエで陶芸をなさると聞いていましたが・・・。

H 様：いえ、引越してすぐ母の介護に追われるようになってしまって、窯はまだ使えていません。でもこの4階のスペースをバリアフリーにして、ほんとはよかったですね。私自身、年をとると思いもよらないことがおきて若い頃にそういうことを考えに入れておくことは大切だと感じています。

—本日はどうもありがとうございました。



①4階バッファゾーン。天井によしずを置いている②4階除湿タワー。③4階外部キャットウォークの壁のシールを補修した箇所。

TOPICS/INFORMATION

「吉祥寺東町集合住宅新築工事」 上棟式 8月31日



工事完成へ向けて一同、改めて気を引き締める機会です。事故のないよう頑張ります。

構造：RC造 地下1階 地上3階
用途：共同住宅
設計：木下道郎／ワークショップ
完成予定：2007年11月

訃報



弊社建築部主任、伊東裕伸は病气療養中のところ10月7日早暁、入院先の三宿病院にて永眠いたしました。満34歳でした。ここに謹んでお知らせ申し上げます。

| | | | |
|----------|---------------|----------------|--------------|
| 担当した物件 | 2003年05月 | Cubic(宮坂2丁目ビル) | |
| 2000年02月 | 三鷹の家S邸 | 2004年05月 | TRIO(代田集合住宅) |
| 2001年07月 | 瀬田5丁目の家S邸 | 2004年10月 | 都立大の家F邸 |
| 2002年03月 | 吉祥寺の家改修工事 | 2004年10月 | 太子堂の家M邸 |
| 2002年04月 | 寿通信機本社ビル増改築工事 | 2005年10月 | 三鷹・玉川上水の家N邸 |

編集後記

・SOI HOUSE の設計者の遠藤氏、マシン・エイジの須田氏にお話を聞かせていただいた今月号。いずれもキーワードは、「タイ」となりました。調べてみると、今年なんと、日タイ修好120周年。日本とタイがお互いの理解を深め、さらなる絆を生み出す年として様々なイベントや記念事業が行なわれています。SOI HOUSEの取材の後、まずは「食」からと表参道の交差点にあるタイ料理の店へ。4種類の調味料の塩がさらに料理を美味しくしてくれました。